

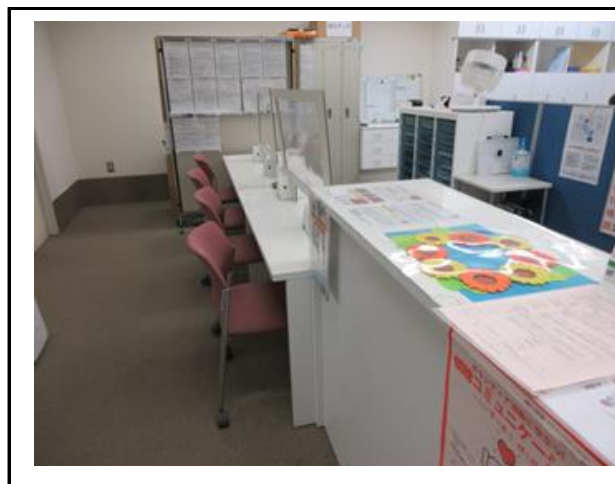
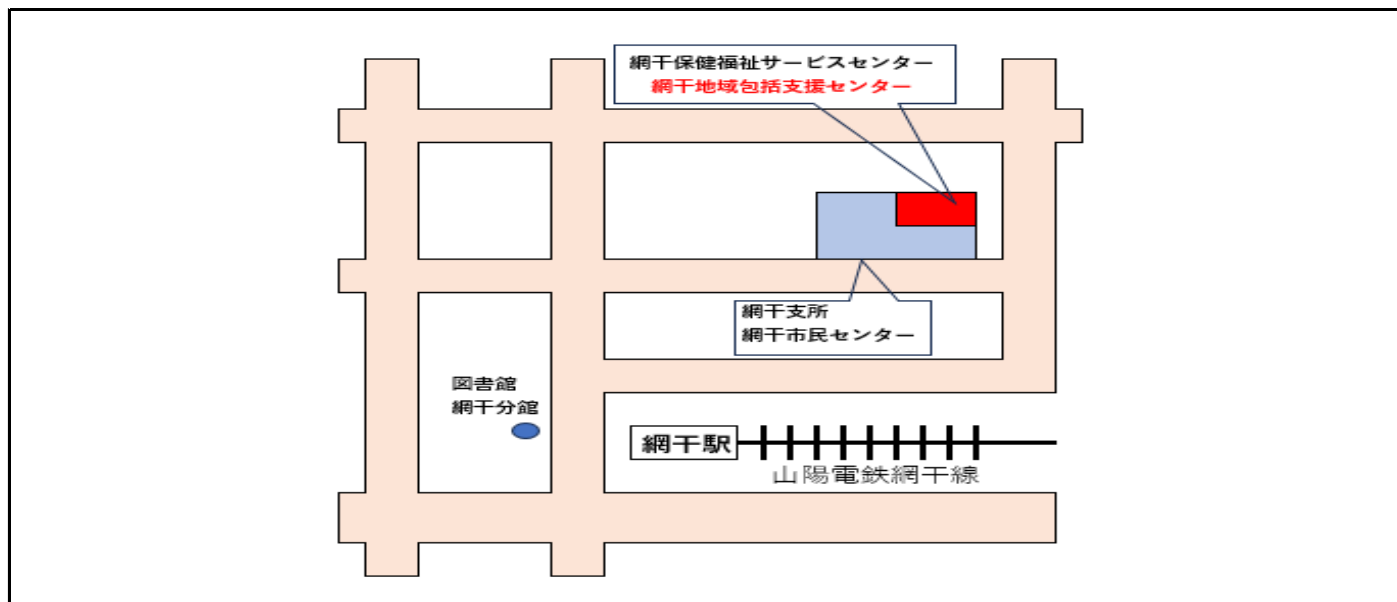
地域包括支援センター適正運営評価 基本調査票

【地域包括支援センター概要】

センター名称	姫路市網干地域包括支援センター
法人名	社会福祉法人 幸
統括責任者名	渡邊 裕樹
管理者名	中村 眞弓
所在地	〒671-1253 姫路市網干区垣内中町119番地
電話	079-272-6936
FAX	079-272-6937
メールアドレス	sachi-aboshi@hyper.ocn.ne.jp
ホームページURL	http://sachi-himeji.com (運営受託法人HP)

【センターの案内】

センターまでの 交通手段	山陽電車網干駅から北東へ徒歩10分
-----------------	-------------------



【センターが所在する地域の特徴・特性】

官兵衛の時代より秋祭りが盛んで自治会のつながりが強く、自治会でNPO法人を立ち上げてあぼしまち交流会館の運営を行っている。あぼしまち交流会館では定期的にふれあい給食はもちろん、色んなイベントが模様され、地元の食材等が売られていたり、地域の集いの場となっている。老人クラブもカラオケ、ペタンク、グランドゴルフと活動が盛んである。地域健康増進活動で輪投げ大会が年に1回は開催されている。

【特に力を入れている点・アピールしたい点】

網干地域包括支援センターの委託を受けて1年と5ヶ月、まだまだ、地域の事が把握できていないので地域の事を知る事に力を入れている。民生委員や自治会の定例会、集いの場への顔出しをして包括の活動内容を周知しながら顔の見える関係性を構築していきたい。また、各居宅介護支援事業所と地域との連携の橋渡しを行いたい。

【令和5年度末の担当圏域の目指す姿】

網干地域包括支援センターと、地域の民生委員、居宅介護支援事業所のケアマネジャーとの連携も図り、一緒に地域の高齢者を見守っていける体制を構築していく。

評価項目・着眼点		地域包括支援センターの体制確保
		(基本的な考え方) 地域包括支援センターは地域包括ケアシステムのコーディネーターとして、高齢者分野の困りごとを地域で受け止める役割を果たすものであり、地域包括支援センターが、介護サービスの相談先以外の役割として地域で認識されることが必要です。
		地域包括支援センターの周知
		① 地域包括支援センターが、介護サービスの相談先以外の役割を持っていることを地域で認識されるようになる。
		② 専門性を生かした地域包括支援センターの運営 専門知識、対応力を備えたセンターのスタッフの確保と人材育成を図る。
セ ン タ ー 記 入 欄	取り組みの状況	① 年2回「網干地域包括だより」を作成して、民生委員、自治会の回覧、郵便局、警察、銀行、スーパー、地域の商店、小・中学校等に配布。集まりの場に訪問し啓発を行っています。 ② 専門研修にとどまらず多職種の研修にも参加して互いの仕事の内容の理解とフォローができるよう努めています。 ③ 毎朝のミーティングで業務の見直し等話し合っって効率化を図っています。
	現在課題と感じていること	①自治会側は自分達で充分地域の連携が図れており、地域包括支援センターの力を借りなくても活動できていると言われます。
	目標達成のための今後の取り組み	自治会の定例会に顔を出したり、地域についての話が出来るように社会福祉協議会を巻き込み働きかけます。
評 価 調 査 者 記 入 欄	評価で確認した特徴的な取り組みや工夫点	イラストや写真を取り入れ構成した「ほうかつだより」を年2回作成し、日ごろの活動内容を関係機関へ手渡しされています。自治会との連携が難しいというかがいましたが、諦めずにゆっくりと信頼関係が深まるように民生・児童委員を介して情報をお知らせするなど地道な努力を積み上げておられます。職員個別研修は、月2回の包括会議で全体共有されています。スムーズな相談援助ができるよう、全員が事務的な手続き対応力などの専門外研修にも参加されています。相談記録や困難事例については、全職員がパソコン上で共有しスムーズに対応されています。
	次のステップに向けた気づきや期待したい点	網干地域包括支援センターの業務内容を地域住民に適切に伝える有力な手段となっている「ほうかつだより」の発行回数が増えると地域住民への意識付けが深まると思われます。予算もあり大変ですが検討を期待します。グループで開催している行事などに参加したくても体調がすぐれない、足がないなどの理由から参加できない方や正しい情報を知らないから参加しない方々が、気軽に足を運んでいけるよう、地道な努力に今後も期待しています。

評価項目・着眼点		基本目標1:生きがいを感じながら暮らすための支援の充実
		(基本的な考え方) 人生100年時代、介護予防に努め、いつまでも自分らしく、生き生きと暮らすことが大切です。そのために、身近な地域活動への参加を増やし、継続することが必要となります。その生活スタイルを周知するとともに、地域活動の場へ通い続けることができる環境づくり、地域で役割をもって暮らすための地域づくりに取り組みます。
		介護予防に関する認識の変革
		① 85歳以上の高齢者に対し、「通いの場」である「いきいき百歳体操」と「認知症サロン」への参加促進を行い、フレイル予防につなげる。 市民向け講座などでフレイル予防に関する啓発・周知を進めフレイルの危険因子を持つ人等を早期に発見する取り組みを進める。
		② 高齢者が通える場があるまちづくり 介護予防への意識が高くない高齢者を通いの場に誘導するとともに、フレイル等で通いの場への参加が中断することを予防するための取り組みを充実させる。
センター記入欄	取り組みの状況	①3ヶ月に1回会場訪問し、参加状況の確認、啓発活動、年に1回のフレイルチェックや体力測定を実施しています。欠席者へは電話で様子を伺っています。 ②長期欠席者には電話や訪問を行い、状況確認して参加を促します。また、マンネリ化を防ぐ為に月1回認知症予防体操を取り入れています。
	現在課題と感じていること	参加者の年齢が80代と高齢になり、世話人の後継者がいなかったり、参加者が減ってきています。
	目標達成のための今後の取り組み	①いきいき百歳体操の後に認知症予防体操や頭の体操・手遊びかるた等楽しみとなるメニューを提供したり、地域の施設と協働して参加者の増加や活性化が図れるよう月1回のペースで支援しています。 ②フレイルチェックや参加者からの意見等を聞きながら栄養、運動、口腔に関する健康講座・フレイル予防を計画していきます。
評価調査者記入欄	評価で確認した特徴的な取り組みや工夫点	「いきいき百歳体操」は11か所毎週開催中で一覧表にて確認できます。出欠情報を把握し1か月長期欠席の場合は、必要に応じて訪問し、多職種連携のもと問題解決に繋がられています。また、継続開催できるようリーダーをサポートする手段として、「いきいき百歳体操」だけでなく、頭の体操など無理なく楽しく行えることがあることを知らせておられます。校区内の事業所にお越し地域住民が参加できるような催し物の開催も検討されています。
	次のステップに向けた気づきや期待したい点	家にいるのはわかっているけど外に出られない独居の方の把握が難しいと感じておられます。地域の若い方にも共生の意識を持ち地域助け合いに協力いただけるよう、母体法人や居宅介護支援事業所、介護保険事業所などに協力を要請し、誰もが住みやすいまちづくり実現に取り組んでいただけることを期待しています。

評価項目・着眼点		基本目標2: 困りごとを地域全体で受け止める体制の構築
		(基本的な考え方) 日常生活圏域単位に市民に身近な場所への地域包括支援センターの設置を継続し、地域の高齢者、その介護者の生活スタイルに対応できる相談体制の強化を行います。困りごとを抱える高齢者やその家族への支援を行う中で、地域共生社会の実現に向けて、他との連携を進めていきます。
		地域包括支援センターの相談機能強化
		① 地域包括支援センターの専門性を活かした相談機能を強化する。
		世代や分野を超えた地域のつながりの構築
センター記入欄	取り組みの状況	①相談には、介護支援専門員、保健師、社会福祉士、認知症担当と多職種が連携し、相談者のニーズに応じた解決策を提案しています。 ②地域との連携が図れるよう、包括だよりを作成し自治会での回覧や、近隣の施設(商店や交番、消防など)小・中学校などに包括だよりを配布し、網干包括支援センターの周知を行っています。
	現在課題と感じていること	高齢者と同居の子供世帯で、子供の障害や、引きこもり、未就労、病気、未婚など様々な理由で生活苦があったり、介護が必要である相談が、当事者からだけでなく地域の情報として周りから話が入ることが多いです。まだまだ地域には様々な問題が潜在していると思うので、地域との情報共有の場や相談しやすい窓口を整えていくことが課題であると感じています。
	目標達成のための今後の取り組み	網干包括支援センターの業務を周知し、民生委員とケアマネジャーの交流会や、小・中学校への介護保険の理解、地域活動での啓発など細かい連携先を増やせるよう取り組んでいき相談しやすい環境を整えていきたいと思っています。
評価調査者記入欄	評価で確認した特徴的な取り組みや工夫点	困りごとを抱えている本人やその家族からの相談件数は少なく、民生・児童委員や各ケアマネジャーからの情報がほとんどとなっています。地域住民の困り事をいち早く知ることができるよう、地域包括支援センターの周知に力を入れています。地域医療連携室がある病院だけでなく個人の病院、薬局などにも周知活動を継続してきたことで少しずつ知れ渡っていると実感しています。7月から8月にわたり「地域の居宅介護支援事業所との交流会」を20事業所の参加により開催し、各地域ごとに困り事を話し合う機会も取り入れ、他職種連携体制で支援を行う架け橋となっています。
	次のステップに向けた気づきや期待したい点	ブロック研修が4回開催され情報共有に努められていますが、進行を前もって緻密に計画することで、地域住民困り事の話し合いを十分確保することに期待します。相談内容が多岐にわたり障害サービス、介護保険サービスの狭間で困るような事例にも母体法人の協力も得ながら円滑に適切なサービスに繋がられる体制を充実していけるよう期待します。

評価項目・着眼点		基本目標3:地域で暮らし続けるための支援の充実
		虚弱・軽度要介護者の重度化防止、自立支援のために、地域活動への参加など多様なサービスの活用を図ります。
		多様なサービスの活用
①	地域の通いの場や多様な主体で展開される介護予防生活支援サービス、在宅医療・介護の連携体制及び認知症高齢者等への支援に係るサービス(地域支援事業)を効果的に活用する。	
②	地域活動への住民参加や支援体制整備のための取り組み 地域ケア会議推進事業、生活支援体制整備事業、通いの場の充実、認知症の人への支援などの取り組みを通して地域の支援体制の充実を図っていく。	
③	地域社会資源の開発とネットワークのための取り組み 高齢者が地域で暮らし続けるための社会資源を開拓していくとともに社会資源との連携が出来るようになる。	
セ ン タ ー 記 入 欄	取り組みの状況	①地域包括センターの活動を周知してもらえるよう啓発し、民生委員や警察からの情報で必要に応じて認知症初期集中支援事業に繋ぎ専門職からの意見を参考に支援に繋げています。 ②老人クラブに催しや集いの場への参加、救護班での支援を行っています。地域住民の困りごとに「地域支え合い会議」にて地域の方と情報共有を行い支援しています。 ③あんしんサポーターの養成講座に参加してもらえるよう啓発しています。
	現在課題と 感じていること	①地域住民に地域包括支援センターの活動内容等認知度がまだまだ低い様に思います。 ②地域で支えあい会議の件数を増やし地域を巻き込んでの支援体制が必要です。 ③「あんしんサポーター」の啓発はしているがなり手が見つからない。「サポーター養成講座」を受けられた方でも仕事内容の個人宅訪問を希望される方が少ないです。
	目標達成のための今後の取り組み	①地域に出向いて地域包括支援センターの周知を図っていきます。 ②1件でも多く地域支えあい会議を開催します。 ③あんしんサポーターが少ない為、自治会・民生の集まりで啓発していきます。
評 価 調 査 者 記 入 欄	評価で確認した特徴的な取り組みや工夫点	「いきいき百歳体操」、「ふれあい給食」、「老人クラブ」開催の行事、「花まるサロン」、自治会行事など積極的に参加することで地域でのお困り事をいち早く知り、多職種で対応できるように努められています。独居の男性高齢者が多いという情報があり、姫路市の地域包括支援課や専門家へも聞きながら相談に対応されています。
	次のステップに向けた気づきや期待したい点	小中学校でもPTAが集まる機会が減っていることもあり、「認知症サポーター養成講座」など啓発活動の声かけをされても、年間計画に組み込んでもらえていない現状があります。学校の中には学校に行けていないヤングケアラーなどの多くの問題を抱えられておられ、今後も地道な関わりを継続し、ひとつずつ問題解決につなげられるよう期待します。生活支援体制検討会議は定期的には開催されています。今後も参加を続け、地域での困り事の把握と問題解決に近づけられることを期待します。

評価項目・ 着眼点		基本目標4: 認知症とともに暮らす地域の実現
		認知症は誰もがなりうるものであり、認知症になっても、住み慣れた地域の中で尊厳が守られ、自分らしく暮らし続けることができる共生社会を目指します。また、認知症の発症を遅らせることができる可能性が示唆されていることを踏まえ、予防(認知症になるのを遅らせる。認知症になっても進行を緩やかにする)に関する取り組みを推進します。
		① 認知症にやさしい地域づくり
		認知症サポーターが地域で活躍できる機会の充実を図る。認知症の本人が、自身の希望や必要としていること等を本人同士で語り合う場を
		② 認知症になるのを遅らせるための取り組み
		高齢者が身近に通える場等の拡充。通いの場を活用し、認知機能低下がある人や、認知症の人に対して、早期発見・早期対応が行えるよう、医療機関とも連携した支援体制の整備。
セ ン タ ー 記 入 欄	取り組みの 状況	①認知症カフェについてに啓発を行っています。 ②認知症初期集中支援での専門職からの意見を参考に支援しています。又病院からの連絡があれば訪問し、サービスにつながらなければ見守り対応をしています。 ③認知症ガイドブックを使つての対応・サービスへつなげるといったことを行っています。公的機関・地域の病院などへの認知症ガイドブックの配布を行っています。
	現在課題と 感じていること	①どなたが認知症サポーターなのか分からず困っている。 ②認知症にならない為の「予防体操」・「頭の体操」には興味を持って下さる方はたくさんいらっしゃいますが「認知症・認知症の方への対応」について知りたい、聞いてみたい。という方はまだまだ少ないように思います。
	目標達成の ための今後の 取り組み	①自治会だけでなく小・中・学校、又30代・40代の若い世代の方にも認知症のことについて理解して頂けるよう話しをする機会やそれに伴い「認知症サポーター養成講座」が開催できるようにしたいです。 ③ケアマネージャーと民生委員が情報共有を測れる場が持てるよう交流会開催を予定しています。
評 価 調 査 者 記 入 欄	評価で確認 した特徴的 な取り組み や工夫点	「認知症気づきチェック」の結果、軽度で今後の対応など心配される場合には電話で相談を受けられることを情報として伝えられています。「認知症カフェ」ではありませんが、自主的に月1回集まって開催している会があり時々顔出しされています。年内に民生・児童委員から「認知症サポーター養成講座」開催希望があるため検討されています。各会の集まり時に認知症の話を重ね、出張相談も受けられています。認知症ガイドブックを警察、コンビニエンスストアにも手渡しされて周知が図られています。
	次のステップに向けた 気づきや期待 したい点	「認知症カフェ」は、認知症になっても住み慣れた地域で暮らせるようにするための1つの手段です。認知症の名称など抵抗感から地域住民に受け入れていただくにはハードルが高い面もあるかと思いますが、運営推進会議でつながりのあるグループホームに協力を得ることも1つの手段と考えます。今後の動向に期待します。小学校、中学校へ「認知症サポーター養成講座」の話を継続され、できれば保護者を巻き込むことで若い方への認知症の理解が進むよう一歩ずつ前進することを期待しています。

地域包括支援センター適正運営評価 評価意見書(総評)

センター名称	姫路市網干地域包括支援センター
実地調査日時	令和6年 9月 13日
評価調査者名	北野 香 ・ 山本 礼子 ・ 寺岡 芳孝

【第三者評価で確認した特徴的な取り組み、工夫点】

職員全員で、地域住民の暮らしの様子や自治会、民生・児童委員、各種団体などとの関係性を構築し、信頼関係を作りながら日々の業務に取り組んでおられます。住民独自の集まりや活動も盛んな地域ですが、自治会などとの関係をより深めていくことが難しい地域もあります。その状況の中でも、民生・児童委員や地域住民、郵便局や商店、地域住民などとの関わりを大切に、一步一步、職員の専門性を活かして、情報共有しながらチームとして取り組まれています。介護や生活に関わる相談、「いきいき百歳体操」、通いの場への訪問など、一人ひとりに向き合い対応をされている地域包括支援センターです。

【第三者評価で確認した次のステップに向けた気づきや取り組みを期待したい点】

通いの場、その参加者の維持継続と、地域の集まりやすい場所の選定、新規開設や、次世代のリーダーの育成が期待されます。具体的な目標をもって地域のあらゆる情報共有の場としても集まる場所、機会、総合相談窓口を増やすことで、多くの情報が集まり地域住民の困りごとなどが気軽に相談できることに期待します。認知症に関する活動は、年齢に関係なく広く多くの住民への周知、啓発活動を、地域住民が楽しく興味をもってもらえる取り組みにされるよう期待します。名前や参加者にこだわらないサロンの開設や「認知症サポーター養成講座」の実施にも期待します。

【市民(住民)からの意見やコメント】

網干地域包括支援センターの委託を受けて2年目を迎えられていますが、まだまだ、地域の実態把握や連携ができていません。民生・児童委員や自治会の定例会、集いの場への顔出しなどで、地域包括支援センターの活動内容を周知しながら、顔の見える関係性の構築に努められています。3年目に向けて活動実績が少しずつ実現されることに期待します。

【評価結果に対する地域包括支援センターのコメント】

社会福祉協議会や準基幹地域包括支援センターと共に生活支援体制整備活動を進めていながら、MCI(軽度認知症)の啓発とフレイル予防を通して、各団体や介護施設等巻き込んで交流を深めていくことを3年目の目標として活動していきます。